

座談会

コミュニティ活動研究の学術的基盤形成と 地域社会調査法入門：コミュニティ活動研究所座談会 2022

- 小林瑞乃 青山学院大学 コミュニティ人間科学部 准教授
「地域社会調査法入門（基礎調査）」（以下、基礎調査）コンビナー
- 横堀昌子 青山学院大学 コミュニティ人間科学部 教授
「地域社会調査法入門（統計調査）」（以下、統計調査）コンビナー
- 大谷康晴 青山学院大学 コミュニティ人間科学部 教授
「地域社会調査法入門（質的調査）」（以下、質的調査）コンビナー
- 耳塚寛明 青山学院大学 コミュニティ人間科学部 学部特任教授
- 西島 央 青山学院大学 コミュニティ人間科学部 教授
コミュニティ活動研究所長、司会

コミュニティ活動研究所では「『コミュニティ活動研究』の学術的基盤形成を目的とする長期的な基礎研究プロジェクト」（コミュニティ活動研究所報第3号）を設けています。「コミュニティ活動研究」がコミュニティという社会的対象を扱っている以上、社会科学としての方法論を備えた基盤が必要であることはいうまでもありません。

青山学院大学コミュニティ人間科学部では、地域社会調査法入門という授業科目を展開してきました。この授業科目は必修科目であり1年次が基礎調査、2年次が統計調査、3年次が質的調査を対象としていわゆる社会調査の基礎を修得してもらう目的で展開されてきました（詳しくは、末尾の「地域社会調査法入門 各科目のプロフィール」でご確認ください）。学術的基盤が確立するためには研究における基盤だけではなく、学問としての基盤も必要であるという認識の元、2022年11月10日に、これまでの教育による成果と課題について意見を交換いたしました。



地域社会調査法入門各科目の現状

西島 本日はお集まりいただきましてありがとうございます。コミュニティ人間科学部の特色の一つとして、地域づくりの基礎を学ぶという中に、基礎的な文献調査、量的調査、質的調査の方法論を身に付け、地域の実態を分析する手法を修得する科目があります。恐らく社会調査士科目を必修にしているわけではない学部・学科で、三つの科目も必修として設定して提供しているのは、多分、珍しいと思うんですよ。だから、これは、この学部の特色になる要素です。

ただ、実際にカリキュラムとして動かしてみると、実際の学生の多様な状況であるとか、われわれの力量とか、どういう状況にあって、どういったところを直していく必要があるのかということが、これから問われていくようになると思います。そこで、まずは、それぞれの科目について、基本的な授業内容を紹介していただけたらと思います。それから8人ないし6人で授業展開していますから、チームティーチングとしての科目における授業努力ということで、全教員で共通して取り組んで工夫もしていることをご紹介いただきたい。そして、実際担当して、科目の理念や想定していたことに対して困難な点とかあればお話をいただくというところに進めていきたいと思います。それでは授業の概要や到達目標についてお願いいたします。

小林 基礎調査ですが、地域社会の活動を対象に、研究を的確に効果的に進めるための社会調査法のうち、基礎的な内容を扱っていて、地域資料や地域情報を調査するための手法を学ぶ科目です。この科目では、複数のゲスト講師を招いて、実際どのように地域資料や地域の人たちとの関わりの中で情報をまとめ、発信しているかという具体的取り組みを聞く授業を、全員で共有するという機会を設けています。

一方で、ゲスト講師の回が多くなると、教室で講義として説明する時間がその分不足してし

まい、調査の学問的な位置づけや、調査から研究の成果をどのようにまとめるかといったことなど方法論を学んだ上でさらに外に調査に行く機会は減り、なかなか他にいろいろな実践ができないというのが課題ではあります。

横堀 統計調査ですが、まず到達目標は、基礎調査で学んだ理解を基にしながら、統計調査を中心に社会調査の概要を理解する方法・技術を体得することにあります。既存の統計データの収集や収集データの集約・分析・活用、さらに実際に作業を行いながらアンケート調査の実施・集計・分析の手法を理解していくことになっていて、基礎的といいながら、結構ボリュームのある授業になっています。そして、この授業では共通教材を軸に置きながら15回を展開しています。実際には、そこに担当教員のオリジナルな内容や資料が加わってきます。

この授業は、とにかく西島先生と耳塚先生が基盤を作ってくださったので、共通教材を使いながら、各教員がそれにさらに工夫を重ねていくことで授業の質を担保しようと試みながらやってきております。

大谷 質的調査は、3年次の授業で、6人の教員で講義科目としてやっております。一応、シラバスのガイドラインは私のほうで用意して、それを参考にしてという形をとっています。授業の内容は、質的調査の手法と分析を理解することからなります。同時に、私個人のシラバスには、これまで学習してきた文献情報の収集と入手、統計調査と併せることで、地域社会を多面的に把握することが可能になることを目標としています。これは、私が着任1年目に統計調査を担当して、翌年から質的調査担当に切り替わったという経緯から統計調査と質的調査をつなぎたいという気持ちがあつてのものです。この点はあまり担当教員の共通認識にはなっていないようです。

主な授業内容は、前半が質的調査の概要、インタビュー調査の説明になります。中間でインタビュー設計の演習を入れています。そして、

後半は観察法とフィールドワークの概要を説明した後は、データの整理として、修正グラウンデッド・セオリー・アプローチ、KJ法等々について紹介するというので、やっています。

西島 2点目は、チームティーチングとしての授業努力についてお願いいたします。

小林 基礎調査では、共通テキストもなく、成績評価についても個々の担当者に任されています。ゲスト講師の回も全クラス必須ではありませんが、実際は全員が参加しています。チームティーチングという意味では、今後教員間でテキストや課題、成績評価等について話し合いが必要ではないかと個人的には思いました。

横堀 先ほど申しましたように、ほぼ毎週、西島先生から、共通素材ということで骨子となるスライドと資料が届きます。それに各教員が少しアレンジしたり、具体的な事例を加えたり、独自教材を加えたり、いろいろ工夫しながら学生の状況や理解度をふまえ、実質的に展開しているという形です。それぞれの教員の分野での統計調査の活用事例を話したり、時事的な問題を取り入れたりといった工夫について聞いています。一律の評価のガイドラインは統計調査では決めていませんが、授業展開時の担当教員の困難や課題については随時、具体的に共有して進めてきました。

大谷 質的調査では、授業内容に関してはできるだけ基本的な内容ということでお願いしています。また、シラバス作成時にはテキストをいくつか紹介しました。そして、期末レポートの課題は全クラスで合わせています。担当教員全員で検討して選定した、質的調査を行っている二つの課題論文を読んでもらって、どういう調査手法でどうやってどこが違うのかとか、どういう特徴があるのかを答えなさいとしています。そして、成績評価も一番上位と次の成績段階に関しては合計して3分の1を超えないようにすることを確認しています。そして、この科目は3年次必修なので、4年次に再履修してさらに落とすと卒業できないことが確定す

るため、担当される先生にはプレッシャーがあります。そこで再履修関係についても状況を共有しています。この辺のことは対面の会合で確認しています。

西島 もう既に、3点目の困難な点に徐々に移りつつありますが、改めてお願いいたします。

小林 最初の調査研究法ということで、まずは地域に限定せず各自関心があるテーマを書き出して、それに関する文献を調べてリストアップしてもらい、万代図書館に行ったり、あるいは資料を取り寄せたりして、実際に文献を見てもらって、自分が読めるものをとにかく借り出すという課題にしてやっと文献調査に慣れていくようです。そこから研究レポートに仕上げていくので、非常に学力的な差があるので困難を感じています。

横堀 授業実施上の困難な点や課題についてですけれども、まず科目間のつながりがまだあまり生かされていない中で、2年次の統計調査はかなり分量があるしたてになっているので学生にとって難しい印象をもたらしている点があります。あと、どの担当教員からも出てくることは、モチベーションと学習意欲の問題です。「え、数学、出てくるの？」みたいな感じで、それだけで嫌な顔をする人もいます。高校までの数学の学習体験のばらつきが、感覚的なところで如実に出ている感じはいたしました。

大谷 カリキュラムからいえば質的調査が完成段階の科目になるのですが教員間での意識共有も不十分かなというのが正直なところです。私は、必修の講義なので調査法に関して最低限を学生に知ってもらえればよいと思っています。本当にその調査手法を使いたくなったときには、演習の授業で担当の先生の指導を受けて、それで研究を進めてよと思っています。ただ、選択肢を知らなければ選びようもないので、選択肢の存在を知っておいてほしいというスタンスで、組み立てているつもりです。

あと、この授業というよりはカリキュラム全体の中で思うのは、この授業を受講している最

中に地域実習（３年次実習科目）に行ってしまう学生がいることです。フィールドワークとか観察について学ぶ授業なので、それを聞かずに地域実習に行ってしまうのは、あまりにもったいないという気持ちになります。

地域社会調査法入門の総括

西島 ここまでの話を受けて耳塚先生からコメントいただけたらと思います。

耳塚 着任して第一に感じたのは、人工的に設計されたカリキュラムであるということです。大体どこの大学のカリキュラムも、歴史の中で継ぎ足し、修正ということを繰り返してきています。それに比べると非常に理論的というか、構造的にすっきりとした形態になっているなということを感じました。そのメリットとしては、共通に学生に求めるものとカリキュラムポリシーを、理屈の上で反映したようなカリキュラムの構造化ができるということ。これは優れた点であると思うし、それから、何を教えるかについて、多様な側面というのも大事です。多様性にも配慮できるという点で、これはいいカリキュラムではないかというふうに思いました。

ただ、いくつか修正したほうがいいんじゃない？と思うところもあります。一つ目、地域社会調査法入門について言えば、基礎調査の中身が、もともとは文献調査が中心の話だと思えますが、正直、何をやっていいのかということが分かりづらいと思います。二つ目として、代わりにあったほうがいいと思うものは、地域社会調査法入門が三つあるけども、内容は全て方法技術で、もっと広い意味での方法論についての議論が出てこないの、社会科学の方法論をオーバービューするような授業があったほうがいいだろうと思います。特にこの学部は、ディシプリンという点でいえば、一つのディシプリンではなくて、複数の社会科学にまたがるようなことを教えたり学ばせたりするので、もっと広く社会学の方法・技術だけではなく

て、幅広く社会科学の方法論を扱うような授業があると、それが導入としていいだろうなと思いました。

三つ目。必修科目を設定して、結構、比重が大きいと思うけれど、全員に履修させようとするカリキュラムの実施方針は、それなりに評価することができると思います。これ、学部教育の理念を形にしたものになっていると思いますが、その場合にいくつかの条件があります。その条件がきちんと充足をされないと、ちぐはぐなものに陥りやすいなと思います。

１番目は、内容と方法の統一性ということです。この点について言えば、統計調査は、西島さんが書いたテキストを中心にして、全体として共有して実施をする体制になっていると思いますので、これは大変によいことです。なかなかここまでできるという大学も少ないんじゃないかと思います。方法・技術の授業なので、こういうことをやってもあんまり差し支えない、考え方が違うという人があんまりいないので、これはいいんじゃないかと思います。

２番目の条件は、授業のレベルとか学生の負担がほぼ等しくなるようにするというのも、必修科目で全員に履修させる上では重要です。基礎演習の状況は、まるでばらばらで、レベルも全然違うんじゃないかと思います。

ただ、カリキュラムがどれだけ実効性を持っているかっていう点で見てみると、要するに狙いとしているものはみんな共通しているのですが、どのぐらい習得されているかという実効性の観点で見ると、ちょっと疑問があります。私は地域社会調査論Ⅳという社会調査士の授業で多変量解析を扱っていますが、この中でクロス集計と三重クロス集計の復習をさせなければいけない。ということは、相当理解していない学生が多い。当たり前だけど、きちんと教えることのできる教員が教える体制が必要です。長期的に見たら、これ、とても重要な課題になってくるだろうと思います。あるいは、時間を二つに分けて、もっと少数の教員が両方と

も担当するようにすると、工夫が必要です。学部ができた当初というのはこういうことが起こりがちで、ちょっと難しいと思いますが、何とかしていかなければならない問題ではないかと思っています。やっぱり複数の教員が共同で担当する科目について言えば、こういう条件は全て充足していかなければいけないことだと思います。

それから、今、方法科目のことを言いましたが、意見はいろいろあるかもしれないけれど、学問の方法ではなくて、つまり研究科目ではなくて、コンテンツを表す科目について言うと、ちょっと不足しているところもあるかなと思っています。この学部では、授業ではどういう地域課題があるのか、そしてどのような解決の方向性があるのか考えるという点が中心になってくるところで、これが求心力を持たせる一つの視点かなと思っています。そうすると、それを満たすためには、そもそも地域課題というものがどういうところにどのぐらいの大きさのものがあるのかということを、誰かが見ていて、これからはこういう問題がもう無視できないとかいうような観点から、カリキュラムの見直しをする必要があるだろうと思っています。

そして、学生の関心を調査することも必要です。どういう点に関心を持っているかということ調べて、学生から小レポートとして出してもらったことがあるけれど、授業科目になくて学生の関心が比較的高いものとしては、交通、観光、あと犯罪の問題などがあって、これは毎年開講する必要はないけれど、何年かに一度はそれに関わるような授業を配置するということは考えていいと思います。これが随分、多様性を高めてくれるのではないかと思います。

西島 ありがとうございます。さて、これから今後の授業科目のあり方や学部カリキュラム全体との関連で話したいだけだと思います。

小林 社会調査の基礎的な方法を教えるのか、地域社会のところに焦点を置くのか。この二つの掛け算として科目が用意されているようです

が、1年次の講義としてそれをやるののだろうかというのが疑問です。あと、学習内容について、応用演習（2年次演習科目）とどう差別化するかというのも課題です。結局、文献調査でよいとなると演習とのすみ分けや、どういう位置付けでこの基礎調査があるのかということで、全体的な話し合いが必要ではないかと思っています。

また、科目の位置付けが、研究理解にあるのですが、研究の手法のようなもっと具体的なところに落とし込んでいるといいのですが、研究理解とはどういうことなのか位置付け自体がよく分からないです。

西島 そうですね。これ、まさに耳塚先生が仰っていた、人工的に設計されたカリキュラムの話につながるかと思います。理屈としてはすごいんだけど、実際、それ、やってみようとなったときに、いろいろ挙げてくださったような状況を踏まえると、なかなかそう簡単にはいかないよねというようなこともあると思います。また、社会調査の専門家からすると、社会学の社会調査からはみ出ている部分も明らかにある。

一方で、科目全体を考えると、今、基礎調査（1年）、統計調査（2年）、質的調査（3年）となっているけれど、いくつかの手法でデータの採り方を紹介して、トータルではそれぞれどういう特徴があるとか、対象それぞれにどの手段が向いているとか、または自分の向き不向きで、どれが得意かというのを学生自身に判断できるように学修してもらおうという流れを作っていくことが必要であるということが4年間実施して見えてきた。

小林 全てがうまくつながればいいですけどね。ここでデータの採り方や分析の仕方を学んでいるから、地域実習に行って、現場から何かをつかんできてくれたらと思うのに、なかなかうまくリンクできていないようで残念です。

横堀 ちょっと切り口違うのですがけれども、私は3、4年次に専門演習（3年次演習科目）

と卒業研究（４年次演習科目）を担当している１人でして、質的研究が３年前期に配置されているのは惜しいなっているのですね。質的調査についてすでに学んだ人として３年前期から専門演習を始められるとよりいいなと思っています。地域実習で質的研究の授業を休む学生がいるという科目配置も惜しいと思っています。

大谷 インタビューも、中途半端なところで地域実習に行ってしまうと。

横堀 そうなんです。なので、全体を見直して、やっぱりリンクを考えたほうがいいのかって、ちょっと思うところ、ありました。

科目のつながりと学習効果

西島 それでは、この授業はこういうふうにしていく必要があるんじゃないか、またはこの授業だけじゃなくて、先ほども出てきた、演習との兼ね合い、基礎演習、応用演習の兼ね合いとか、地域実習や専門実習以降との兼ね合いで、どうしていけばいいか。またはこの三つの中では、これも今出てきたような形でこういうふうな工夫が必要なんじゃないかとか、思うところを、順番関係なく、お聞かせいただければと思います。

大谷 専門演習、卒業研究の担当教員として、研究方法や手続きではなく、考察のところを見て文献を選ぶ学生が多過ぎて、どうなのかなとは常々思っています。この科目は、本当に社会科学で行われている社会調査の方法論をきっちり修得してもらうという点に焦点を絞った方がよいように思います。

西島 そこをあえて前面に出していくと、単なる調べ学習にならないようなためにはどういう手続きが必要なのかというのを、しつこいほど繰り返して指導するとした場合に、ちょっと枠を狭めて、狭めるという表現が良いかどうか分からないけれど、社会科学で行われている社会調査と打ち出すというのも、そういう考え方もあるということですよ。

大谷 あと、文献を使った研究は、本格的に行うのはやっぱり難しいと思うので。最初に学ぶ話ではないように思います。

小林 地域資料に多様性があるというのはどこかで触れる必要があるのは確かです。もっと共通してチームティーチングとしてやるならば、今現在、どんな社会的な課題があるかとか、そこから社会調査というのが出てきたのだとか、そういう本当に基本的なことについてしっかりと理解してもらうように最初に説明してもいいと思うんですよ。

大谷 私は社会調査法の基礎を最初に学修する科目としては、具体的にどんな調査があるんでしょうかといった、本当にさわりを学べば良いと思います。そして、残りは統計調査と質的調査が説明して、あとは、３年次以降の専門演習とか卒業研究の中で、自分の課題と自分の関心に合わせて実際に実践してくださいという形で、それでカリキュラムとしてはいいと思うんですよ。さらに、そうやって学んだものを基に、地域実習ではお試しでちょっとやってみますとすれば良いと思っています。

横堀 学生の中で各授業科目の内容がつながるっていうのが大事ですよ。現在は、まだばらけてる感じでしょうか。

小林 つながれば、自分が学んでいることが腑に落ちる。やっていることにこういう意味があるのだとわかれば、モチベーションも上がるだろうけれど、実際には細切れになっていて、履習者にとっても位置付けは難しいと思います。

カリキュラム全体への要望

大谷 とにかく、質的調査まで合わせて、地域実習の前に終わるようにしてほしいと思います。この学部は１年間に取れる単位数の上限が厳しい（１年次が４０単位、２、３年次が４１単位）ので、あんまり低い学年で必修を多く履修させるのは問題だというのは分かるのですが、少なくとも最低限の調査的なやり方については学んだ上で、３年次を迎えて地域実習に

行ってくるという形にしてほしいなどは感じています。

西島 あと、専門演習の前に地域社会調査法入門全科目を学んで、このゼミ取ると、どういう手法が使えるのかとか、調査法で選んでもらえるといいというのはありますよね。

大谷 せっかくこの学部に来て、学生は何を得られるのかというのは重要だと思っています。史学での史料批判は割と分かりやすい、学ぶ者が得られるものの一つだと思うんですよ。他の学問ではなかなかやらない、だけどすごい大事なことから、それを得ているっていうのは一つの成果だと思うんですね。この学部の場合、方向性はばらばらな分だけ、せめて社会調査的なものはそれなりに分かりましたというのは、学生に何かを獲得させるという意味でも、大事なかなというふうには思っています。

横堀 学生には、統計から言えることと、質的

に個別の実例、事例から言えることの両方を大事と思える育ちをしてもらいたいなと、とても思っています。私が福祉の分野なので、統計をしっかりと適切に使ったり、データのもつインパクトを知ったりしてほしい一方、個別の出会いを得てほしいのです。人と社会に出会うという文脈でそれらはつながっていると思うのですが、そこをきちんと意味づけできるような、人としての感性の部分は大事だと思うので、感性を育てつつ知的な力をのばしてもらいたいというのが何よりの願いですね。その両方を使いながら専門演習・卒業研究で学生の成長を応援したいなと思っています。

西島 今日は、3つの科目それぞれの状況、課題、展望をお話いただき、重ね合わせることで、コミュニティ活動研究の学術的基盤の確立に向けて、有意義な意見交換をすることができました。ありがとうございました。

地域社会調査法入門 各科目のプロフィール

注記

※ 各科目の2022年度講義内容をもとに編集・作成

※ 半期全15回のうち第1回目は全学的な決定によりオンデマンド形式による授業

科目名	地域社会調査法入門（基礎調査）	
対象学年	1年	
学期	後期	
クラス数	8クラス	
講義概要	地域社会における人々の活動を対象にした研究を的確かつ効果的に進めるために必要な社会調査法のうち、基礎調査に相当する内容として、地域資料・地域情報を調査（検索、入手、活用）するための手法を学びます。 まず、地域資料・地域情報を調査する際に有用な、地域の図書館、博物館、文書館その他の施設・機関の利用方法を指導します。次に、地域資料・地域情報の入手に関して、行政・議会が発信する資料・情報、統計資料・情報といった種別ごとに、具体的な方法を説明します。その上で、地域資料・地域情報の調査に伴う留意点として、個人情報の取り扱いと知的財産権（著作権）の尊重に関して解説します。 なお、扱う資料・情報には、印刷資料、音響・映像資料、デジタル情報（インターネット情報）など、多様なものを対象とします。	
達成目標	1. 地域資料・地域情報を調査するための施設・機関の利用方法を理解すること。 2. 地域資料・地域情報の種別の特性に基づく入手方法を理解すること。 3. 地域資料・地域情報の調査において留意すべき事項を理解すること。	
授業計画	1	ガイダンス
	2	地域資料・地域情報について
	3	地域資料・情報の調査について

授業計画	4	地域の施設や機関の利用について
	5	調査に際して留意すること：個人情報取り扱いと知的財産権（著作権）の尊重
	6	地域社会調査の事例研究① 地域の特性に根差した資料館
	7	地域社会調査の事例研究② 歴史と今の視点から
	8	社会調査の事例研究③ テーマ別の課題
	9	研究課題に取り組む① 地域とテーマを決める
	10	研究課題に取り組む② 地域資料・情報の調査と収集
	11	研究課題に取り組む③ 調査結果の整理
	12	研究課題についての中間発表会
	13	グループ討議：振り返りと問い直し
	14	地域の視点とグローバルな視野～地域・日本・世界と私達～
	15	研究発表会
授業の実施形態	この授業は対面授業で実施します。 基本的には講義形式で行いますが、調査活動に対して実践的な理解ができるよう、必要に応じて演習作業を組み込みます。	
活用される授業方法	プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート、グループワーク	
成績評価	成果物の作成（80%）、授業中の課題解決（20%）	

科目名	地域社会調査法入門（統計調査）	
対象学年	2年	
学期	前期	
クラス数	8クラス	
講義概要	「地域社会調査法入門（基礎調査）」で学んだ知識と技術を活かしながら、地域社会（コミュニティ）で活動する人々の様態と、そうした人々の意識に関するデータを収集できるように、社会調査の手法のうち、統計調査に相当する内容を中心に扱います。 第一に、社会調査の概要として、定義、種類、対象、方法と調査の倫理などについて説明します。 第二に、コミュニティで活動する人々の様態や意識を把握するために、どのような既存統計データがあるかを紹介し、関心のある地域社会や研究テーマに合わせたデータの収集のしかたを説明します。そのうえで、実際に既存統計データを収集して、集約と分析の作業に取り組みます。 第三に、コミュニティで活動する人々の様態や意識の特徴を把握するために、自らアンケート調査を行う場合の進め方と分析手法を説明します。そのうえで、実際に先行研究を参考にして学生間でアンケート調査を行って、得られたデータの集計と分析の作業に取り組みます。	
達成目標	1. 統計調査を中心に、社会調査の概要を理解すること。 2. 既存統計データの収集のしかたと、収集したデータの集約と分析のしかたを理解すること。 3. アンケート調査の進め方と、アンケート調査で得られたデータの基本的な分析手法を理解すること。	
授業計画	1	イントロダクション～授業の進め方の確認など
	2	大学における知的探究と社会調査
	3	社会調査の概要：社会調査の定義、種類、対象、方法、調査の倫理
	4	既存統計データの収集と活用
	5	統計調査の基本的な分析手法①：単純集計表の作成、代表値の算出
	6	統計調査の基本的な分析手法②：二重クロス集計表の作成

授業計画	7	統計調査の基本的な分析手法③：三重クロス集計表の作成（１）～相関関係、因果関係、擬似相関
	8	統計調査の基本的な分析手法③：三重クロス集計表の作成（２）～相関関係、因果関係、擬似相関
	9	アンケート調査の進め方の確認、今後の共通アンケートの集計と分析作業の提示 自分の関心のあるテーマや地域の既存統計データを用いた小レポートの講評など
	10	共通アンケートの集計と分析作業①：４クラス分のデータの提示 第10回から第14回までの課題の提示
	11	共通アンケートの集計と分析作業②：基礎集計表 前回の作業課題の紹介・講評と、次回の課題の提示
	12	共通アンケートの集計と分析作業③：代表値１ 前回の作業課題の紹介・講評、次回の課題の提示
	13	共通アンケートの集計と分析作業④：代表値２ 前回の作業課題の紹介・講評、次回の課題の提示
	14	共通アンケートの集計と分析作業⑤：二重クロス表・三重クロス表１ 前回の作業課題の紹介・講評、次回の課題の提示
	15	共通アンケートの集計と分析作業⑥：二重クロス表・三重クロス表２ 前回の作業課題の紹介・講評、要点の確認・まとめ
授業の実施形態		基本的には、社会調査の概要や統計調査の進め方と分析手法などに関する説明を講義形式で行いますが、統計調査の実施と分析について実践的な理解ができるように、必要に応じて、演習作業を組み込みます。第１回授業をのぞき、対面で授業を行う予定です。
活用される授業方法		プレゼンテーション、PBL（課題解決型学習）、ディスカッション、ディベート
成績評価		授業中の作業課題への取り組み（40%）、成果物の作成（60%）

科目名	質的調査
対象学年	３年
学期	前期
クラス数	６クラス
講義概要	この授業科目は、地域社会を調査する基本的な方法を修得するための科目であり、特に質的調査といわれる調査の手法について学ぶ科目になります。質的調査とは、量的な調査では分かりえないものをデータ（質的データ）として収集して分析する調査の手法です。授業の主たる内容は、質的調査とは何かを理解すること、調査の手法を理解すること、調査の結果からどのように分析を行っていくのかを理解することからなります。 同時に、これまで学修してきた文献・情報の収集と入手、統計調査と合わせることで、地域社会を多面的に把握することが可能になることを目標としています。
達成目標	１．質的調査の定義や意義について学習した用語を使用して説明できる。 ２．インタビューの実施方法を理解して自分で実施する場合の実施計画を作成できる。 ３．質的調査で収集したものから必要とする質的なデータの取り出し方の概要を説明できる。 ４．必要とする地域に関するデータを、既存の文献や情報、量的な調査、あるいは質的な調査のどれから収集するのか自分で選択できる。

授業 計画	1	ガイダンス（授業の内容と意義を理解する。授業の進め方や成績評価方法を確認する。）
	2	質的調査の概要（質的調査の定義。質的調査と量的調査の対比。質的調査の基本的な流れ）
	3	先行研究の検討とリサーチクエスションの設定、調査の手法
	4	データ収集とデータ分析の手法、質的調査の倫理
	5	インタビュー調査における事前の準備
	6	インタビュー調査中の注意点、調査後の作業
	7	インタビューの種類と質問の技法
	8	インタビューの調査設計の演習
	9	観察法
	10	フィールドワークの概要（定義、手順）
	11	フィールドワーク上の注意点、事例研究
	12	質的データの信頼性と妥当性
	13	質的データの整理、コーディング、カテゴリ化
	14	内容分析とテキストマイニング
	15	適切な調査法の選択（問題意識と先行研究の整理を通じてどのような調査を行うのかを決定する。）
授業の 実施形態	基本的に講義形式で実施します。必要に応じて講義内容の理解を促すための課題に取り組んでいただくことがあります。 この科目は、対面授業（通常型）：第1週目を除いたすべての授業を対面で実施します。	
活用される 授業方法	グループワーク	
成績評価	期末レポート（30%）、授業における意見・感想・質問（40%）、課題作業への取り組み（30%）	